

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

現代英文学にみるユダヤ人像

| | |
|-----|---|
| 著者 | 河野 徹 |
| 出版者 | 法政大学教養部 |
| 雑誌名 | 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 |
| 巻 | 89 |
| ページ | 1-30 |
| 発行年 | 1994-02 |
| URL | http://hdl.handle.net/10114/3822 |

現代英文学にみるユダヤ人像

河 野 徹

「葉巻をくわえたブライシュタイン」他 (T. S. エリオット)

わたしの家は、ぼろ家です、／おまけに主は窓の敷居に蹲まるユダヤ人、／
アントワープの酒場あたりで放^{はな}下され、ブリュッセルで水疱吹き、／
ロンドンくんたりで膏^は薬貼り、かさぶたむいたユダヤ人。⁽¹⁾

初期代表作の一つ「ゲロンチョン」に刻みつけられたこのユダヤ人像は、「偏見」として問責すべきものか、それとも「メタファー」として容認すべきものか。作者 T. S. エリオットが「文化的英雄」とまで称された大詩人だけに、「偏見」か「メタファー」かをめぐる論議の応酬は延々と続きそうである。彼の「反ユダヤ主義」を実証するためにこの4行と同じ頻度で引用されるのは、「ベデカーを携えたバーバンク、葉巻をくわえたブライシュタイン」の次の3節である。

ともあれブライシュタインの流儀はこんな風、／膝と肘をだらりと曲げて、ひらりと掌をひるがえす、／シカゴ産ウィーン系ユダヤ人。

どんよりしたどんぐり眼のまなざしが／原生動物の粘泥^{のろ}のなかから
カナレットの透視画を凝視している。／時の蠟燭のしっぽが煙り

燃え傾く。そもそも昔リアルートで。／積荷^{かね}の下は風ばかり。

せり売り台の下にはユダヤ人。／毛皮を着た金。舟人は微笑する、⁽²⁾

そして「ナイチンゲールに囲まれたスウィーニー」でも、「女レイチェル、お里の姓はラビノヴッチ／殺意のにじむ爪先で葡萄の実をひきちぎる」(‘Rachel née Rabinovitch/tears at the grapes with murderous paws’) という2行が、⁽³⁾ 当然俎上に上る。

紛うかたなく悪意を含んだ思想が文化の名において正当化され、だれも敢え

でそれに憤らない現象を時代の「文化病」と称するが、上の引用に登場する「ユダヤ人」は象徴か比喩にすぎないから、偏見か否かを問う必要はないという考え方も、やはり「文化病」の一種なのだろうか。たしかにエリオットは、「ユダヤ人」を「高利貸し」(‘USURA’)と同義的に用いたエズラ・パウンドのように、意識して「反ユダヤ主義」を高唱してはいない。しかし意識下でどことなくユダヤ人を忌み嫌っていないければ、あのようにユダヤ人を汚く、底意地悪く表象しようがないではないか、と疑うこともできる。ヴァージニア・ウルフの夫君でユダヤ系のレナードも、「例によって漠然としているが、エリオットはいささか反ユダヤ的だったと思うね。もしそんな風に言われたら、彼としては本気で否定しただろうけど」と証言している。⁽⁴⁾

それにしてもエリオットがあのようなモザイク的詩法で紡ぎ上げた、「人間疎外」に伴う混沌状態と不毛感のスリリングな表現表象は、同世代の読者に圧倒的な影響を及ぼし、ユダヤ系知識層もその例に洩れなかった。レズリー・フィードラーによれば、「自分と同世代のユダヤ人インテリにとって、エリオットを否認することは、精神的支柱の一本を外すようなものである。彼らの多くにとっては、ハンディズムの祖バアル・シェム・トヴや<ヨブ記>の作者よりもエリオットから受けた影響の方が深かった。……われわれの言語は英語であり、そのリズムとイディオムでかわれわれの乾いた絶望と静かな希望をエレガントに表現したあの声を棄て去ることはできない」⁽⁵⁾ 彼らとてエリオットのユダヤ人像に眉を顰めなかったわけではあるまいが、実際以上にひどく描かれているのはユダヤ人だけではなく現代人とその文明全般なのだから、と理解を示したのだろう。1930年代から40年代のユダヤ人インテリは、大半が東欧出身で、何としても宗教的、民族的桎梏を抛ち、普遍的な文芸共和国に加わりとう意気込んでいた。したがって、反ユダヤ云々と騒ぎ立てれば、お前はノイローゼを患っているのではないか、文学的に鈍感なのではないか、と疑われる恐れがあった。

デイヴィッド・デインズなどは、上に挙げた芳しからぬユダヤ人像の対蹠的な例として、「<岩>の合唱」第4節から次の5行を引用する——「予言者ネヘミアの時代には／一般的な規則に例外はなかった。／宮殿シェーションで、ニサンの月に、／彼は葡萄酒を王アルタクセルクセスに捧げて、／破壊された都、エルサレムのことを嘆いた」⁽⁶⁾ しかし、キリスト教思想のなかで、旧約時代の「真の」ユダヤ人と、キリスト磔刑以後の「呪われた」ユダヤ人は別の

存在なのだから、エリオットはその旧套を守ったに過ぎない。

幻滅世代の声とされる『荒地』の作者も、やがて文化面で建設的意見を世に問うことになり、カトリック教精神を基調とした「宗教面での文化的統一」をその理想とした。理想社会の建設に欠かせないのは、構成員の結束とともに、構成員が恐怖を投影せざるを得ない仮想敵である。エリオットがその仮想敵に選んだのは、「自由思想的なユダヤ人」であった——「住民は同種族でなければならない。二つあるいはそれ以上の文化が同じ場所にあると、それぞれひどく自己を意識するようになるか、ともに混りあって不純なものとなりやすい。さらにこれよりも大切なのは、宗教的背景の統一ということである。そして以上のような民族と宗教にかかわる理由から、自由思想的なユダヤ人があまり多く混じっているというのは望ましいことではない。都会と田園、工業と農業など、それぞれの間には適当な均衡がなければならない。極端な寛容の精神は排すべきだ」⁽⁷⁾

非ユダヤ人は従来、シャイロックやフェイギンの系列につながる半悪魔的なユダヤ人像に恐怖を投影してきた。ヨーロッパで「異端」といえばユダヤ人、「異宗」といえばイスラム教を指す。「現代異端入門」という副題の付いた『異神を追いて』のなかで、異端の筆頭にすえられたのは、やはりユダヤ人であった。詩のなかで「ユダヤ人」が金権と自己疎外の象徴として底意地悪く利用されているのをいわば「横目で流し読み」していたユダヤ系知識人も、散文のなかで自らがあからさまに「仮想敵」扱いされたとき、エリオットの「反ユダヤ主義」を早晩再考しないわけには行かなくなったのだ。

*

*

*

こうみえてくると、上に挙げたいくつかの引用は、エリオットの主流的思想からの逸脱というより、むしろその前提を暗示するものかもしれない。「ゲロンチョン」でも、「ベデカーを持ったバーバンク／葉巻をくわえたブライシュティン」でも、現代の精神的荒廃を再生する必要上、断片的情景をモザイク風に構成して行く手法は同じである。その不連続的断片のモザイクが稠密を極めているところに、ヨーロッパの文化的伝統の迷路的な複雑さが窺われ、「よそのもの」にとってその奥の院へ入り込むことは絶望に近い。

「ゲロンチョン」の登場人物中でもとくに珍妙な「チチアーノの絵の間で叩頭するハカガワ氏」は、芸術的事大主義者の日本人を戯画化したものだし、その他名前からしてコスモポリタン風の「魂がもぬけの殻」みたいな男女の挙動

は「虚空の梭が風を織る」ようなものだ。この風は「雨なき月の老いの身」ゲロンチョンが晒されているすきま風に他ならず、すきま風だらけの朽ちた「ぼろ家」は現代の「荒地」文明ということになる。その「ぼろ家」はユダヤ人という国際的金権の所有物だ。

このユダヤ人の素性のいかがわしさは、国際都市アントワープのバーで産み落とされ、同じくブラッセルで性病に罹り、同じくロンドンで絆創膏だらけになるという頹廃堕落の標本であるところからも窺える。「うずくまる」(‘squats’) というのは、犬か猫の姿勢を思わせ、「放下され」つまり「放り落とされ」(‘spawned’) というのは、サケやマスの産卵を思わせる語で、人間の数に入っていない。

荒涼たる現世にも希望がないわけではなかった。熱と光の象徴たる虎となってキリストが来臨し、新たな生の原理を約束するかにみえた。ところが「不良の5月」つまりルネサンスは、山ぐみや栗を突らせただけでなく、キリストを裏切ったあのユダの木の花をも咲かせてしまった。告白者ゲロンチョンを含め、キリスト教の正統から切り離されてしまった根なし草のコスモポリタン近代人は、「語られざる言葉」を理解できない。情熱と感覚の喪失、「おまけに千のけちな気遣いめもいっしょになり、氷った錯乱の利益を引き延ばす」(‘These with thousand small deliberations/Protract the profit of their chilled delirium,’)⁽⁸⁾ 無数の下策が「氷った錯乱」つまり靈魂の無機能に便乗して、混沌と分裂を幾層倍にもふやし続ける。この断片化した現代人の宿命を、まさに断片のみで緊密に構成したエリオットに対しては、ユダヤ系知識人らも「叩頭」なきを得なかった。しかし叩頭しても、仲間に入れてもらえるわけではなかった。非キリスト教徒ヨーロッパ人というのは、エリオットにとって撞着語法であった。エリオットは「ユダヤ人」を、「アウトサイダー」のアーキタイプとして重宝したのである。

*

*

*

続けて「ベデカーを持ったバーバンク／葉巻をくわえたブライシュタイン」を扱ってみたい。「(アメリカ人のツーリストと思われる) バーバンクは小さな橋を渡り／館まがいの安ホテルに降り立った。／ヴォルビーネ姫がお着きになって／二人はいっしょになり、彼は墜ちた」⁽⁹⁾ ヴォルビーネとは‘voluptas’ (肉欲) と‘lupus’ (狼) の合成で、この「プリンセス」は「プロスティテューート」を茶化したものだ。『アントニーとクレオパトラ』的な水上の饗宴を思

わせる御座船、いや屋形舟のなかで、ヴォルビーネは情事の相手を次々と換えて行く。シェイクスピアその他からの引用を連ねた序詞は、登場人物にとって無縁異質な歴史的連想を並べ、対比的に現代ヴェニス¹⁰のデカダンの醜悪を浮かび上がらせるエリオット独特の手法である。ヴォルビーネの相手は、バーバンクからやがてブライシュタイン¹¹に変わるだろう。

この男は、国籍不明の「シカゴ産ウィーン系ユダヤ人」で、「原生動物的な」無感覚状態のなかでカナレットの風景画を凝視しているというのだ。ついシャイロックの有名な台詞「ユダヤ人に目はないのか」が思い浮かんでくる。エリオットがその場にいたら、そりゃ目はついているだろうが、カナレットやマンテーニャやヴェニスの建築美が分かるような目じゃない、と答えたかもしれない。ブライシュタインは「リアルター」つまり大取引所に属するヴェニスの商人で、たしかにシャイロックと無縁ではない。「毛皮をきたお金」(‘money in furs’) というから、毛皮貿易で蓄えた富をもとで遊蕩三昧となり、かつては栄光に満ちていたこの都市の精神的土台をネズミのように齧り続けている。

1969年版の全詩集では、「ユダヤ人」が‘the Jew’と通常の綴りになっているけれども、当初は「ゲロンチョン」でも「バーバンク／ブライシュタイン」でも‘the jew’とJが小文字に組んであった。「うずくまったり」「放り落とされたり」ネズミと等辺に置かれるのが‘the jew’であれば、殊更に小文字にしてあるのは「非人扱い」(精神分析風に言えば「去勢」)を狙った意図としか言いようがない。ディケンズがやはり、『オリヴァー・トウィスト』の影の主人公フェイギンをこの上なく醜悪なユダヤ人として描き、ユダヤ系の一女性読者からその非をたしなめられた後で、フェイギンの呼称として専用していた「ユダヤ人」という語の多くを抹消するか、「彼」もしくは「フェイギン」に差し替えた。そのディケンズも初めのうちは、「ユダヤ人がなぜわたしのことをく反ユダヤ的>とみなし得るのか、見当もつかない」と言っている。⁽¹⁰⁾ エリオットも「わたしは反ユダヤ主義者ではないし、そうであったこともない。そんなことを言うなんて、一人の人間に対するひどい中傷だ」と応じている。⁽¹¹⁾ しかし歴然たる証拠が詩にも散文にも残っており、いつまでもユダヤ人読者を傷つけていることは否定できない。

エリオットは、やはりユダヤ人の女性から、ディケンズの場合よりもっと手厳しい抗議を受けている。1950年初めにエリオットは、保養のため南アフリカ

のゲーブタウンを訪れ、ミリン判事夫妻の別荘で歓待を受けた。小説家兼伝記作家のミリン夫人が、著書をフェイパー社から出していた縁だろう。最初の晩に話題となったのは、イセエビ、海水の温度、ネズミである。ミリン夫人は、ヨハネスブルグの自宅でネズミが殖えはじめていると苦情を洩らした。「どれくらいの大きさですか」「子猫くらいかしら」「どんな子猫ですか。子猫といってもいろいろでしょ」ミリン夫人はエリオットを見据えた——「子猫といったら子猫ですよ」その夜就寝前に彼女が（ネズミの一件で記憶を刺激されたのだろうか）エリオット詩集をめくっていたら「積荷の下には鼠ばかり。／競り売り台の下にはユダヤ人」の2行が目飛び込んできた。彼女はユダヤ人としてこれを見過ごすわけには行かず、すぐさまエリオットの部屋へ赴き、「これを書いたのはあなたですね」と確認した上で、翌朝この家を立ち退いていただきたい、と申し渡した。⁽¹²⁾ この一件の影響だろうか、重版された詩集では‘jew’が‘Jew’に、小文字が大文字に直されていた。ディケンズが「ユダヤ人」という語をいくらかみ消しても、作品全体に瀰漫しているユダヤ人嫌悪の基調は小揺るぎもなかったのだ。小文字を大文字に変えたからといって、ユダヤ人のエリオット観が変わるとは思えない。

「バーバンク／ブライシュタイン」をさらにたどって行くと、ヴォルビーネ姫が次に迎えたのはサー・フェルディナンド・クラインで、「プリンセス・ヴォルビーネ」同様貴族的な響きを持つ名前だけれども、サー・フェルディナンドにクラインという姓などつくわけがない。みえみえのユダヤ人である。「誰が（この都市の紋章でもある）獅子の翼をもぎ取った？ 髯を刺し、爪を剥がした？」というバーバンクの最後の問いに対する答えは、「クラインやブライシュタインの一味」でしかあり得ない。ヴェニス関連の文学・美術案内を一、二冊繰ればすぐ分かるように、英米文学だけでも実に多くの詩人・小説家がこの都市の栄枯盛衰を題材としている。しかし、詩の中心にユダヤ人を持ち込み、ヴェニスの没落をユダヤ人のせいにした文人は、エリオットを以て嚆矢とする。

「われらは等し並みに人間」といった連帯意識を、同志的なエリートだけに限ったり、二本足で歩き葉巻をくわえ金持ちであるからといって、それだけでやすやすと人間性を認めるわけにはいかないと問い募る排他性は、どこから生ずるのだろう。一種の防衛機制だろうか。ヴェニスいやヨーロッパ全体に悪影響を及ぼした無法者というユダヤ人像は、集団的パラノイアの幻想であり、この

幻想に基づけば、歪められた神話的断片のコレクションとして歴史を処理できよう。排他性を含んだ「伝統」観は、晚かれ早かれ独善臭濃厚な文学的イデオロギーと化する。デルモア・シュウォーツはエリオットのユダヤ人観を「ヨーロッパで地方的アメリカ人として覚えた不安と、イギリスで身に着けた俗物根性とが混じり合ったもので、後者が前者の上張りになっている」と評した。⁽¹³⁾

たしかにヨーロッパ人としてのアイデンティティを声高に唱える必要は、そのアイデンティティが定着していない証拠なのだろう。ヨーロッパで最も排他的なナショナリズムを発達させたのは、小国の寄せ集めで、民族的統合意識の記憶に乏しいドイツであった。理想的な先祖として古代ゲルマン人、外敵の首魁としてユダヤ人が選ばれた結果、ユダヤ人は「われらの災い」(‘Die Juden sind unser Unglück.’)として文化的墮落の責任を最も悲惨なたちで負わされた。1940年にエリオットは、パウンドがユダヤ人について述べたいかなる意見にも与しないと声明しているし、⁽¹⁴⁾彼にとってナチズムは「異教的」だったはずだから、それに同調したはずもなかろう。しかしまったく意識構造上の類似性がなかったかとなれば、答えに窮してしまう。

エリオットは、『異神を追いて』中の問題の箇所が巻き起こした大反響に当惑してか、同書を再刊させなかった。やはり1940年になってからだが、「キリスト教社会の理想に対する脅威として、なぜく自由思想的なユダヤ人>を選び出したのか」という質問状に次のような回答を寄せている——「人種の如何を問わず、自由思想家多数の存在をわたしが好ましく思っていないことはお分かりのはずで、自由思想的ユダヤ人というのは、特例の一つに過ぎません。ユダヤ教は残念ながら、あまりくポータブルな宗教ではなく、伝統的な慣習や行事やメシアニズムを削がれていますから、一種の無味乾燥なユニテリアニズムになりがちです。白人種の自由思想的なヨーロッパ人やアメリカ人は、たいていキリスト教の道徳的習慣や慣例の多くを保っています。個人が保っていなくても、そういう習慣はある程度まで社会に存続します。自らの宗教的信仰から遊離しているユダヤ人は、その遊離ゆえに、キリスト教系の人々よりもはるかに根無し草的なのです。わたしが危険だと思い、また無責任に傾きやすいと思うのは、まさにこの根無し草的性質なのです。しかしわたしの見解には、人種を理由とするいかなる偏見も含まれていません……」⁽¹⁵⁾

これを読んで、エリオットの「反ユダヤ主義」もやはり対象に関する認識不足をその一因とすることに気付いた。ユダヤ教は、狂った一部キリスト教徒ら

の弾圧にもめげず、ユダヤ人が片時も手放さなかった「トーラ」というまさに「ポータブル」な精神的権威を拠り所としており、それが残っていたからこそ、離散二千年の苦難に耐え抜いて国土を回復し得たのである。キリストをメシアとしない独自のメシアニズムを信じているから、ユダヤ人はユダヤ教徒なのであって、たとえ自由思想的なユダヤ人でも、ユダヤ人として最低限の伝統は保っている。かりに不可知論者として宗教や神を斥けても、アブラハム、イサク、ヤコブの神つまりヤーヴェーへの信仰を核心とするユダヤ教文化を斥ければ、ユダヤ人としての自己を失うことになる。むしろ通文化的視野と普遍的合理主義に支えられた自由思想的なユダヤ人の方が、頑迷固陋な正統派篤信者よりも、ユダヤ教の教えの最良の部分を実践している場合が少なくない。ユダヤ教ラビの間でさえ自由思想家は何人もいる。

同じエリオットでも、T.S. ではなくジョージの方、そして T.S. と同じモダニズムの旗手だったジェイムズ・ジョイスの、ユダヤ人でさえ舌を巻く該博かつ深遠なユダヤ学的知見に比べて、T.S. のそれは何と見劣りすることか。エリオットの「反ユダヤ主義」は、ユダヤ人と聞くだけで吐き気と憤りを催す初原的なユダヤ嫌いに近いものだったのだろうか。リックスの言うとおりに、「敵意と偏見は血のつながったきょうだい同士である」(‘Animus, then, is a sibling of prejudice.’)⁽¹⁶⁾

エリオットがたまたまヴァージニア・ウルフとタクシーに乗り合わせたとき、ウルフから「最もひどいこと、ほんとに最もひどいことって何かしら」と聞かれた。エリオットは「恥をかかせることでしょう」と答えている。⁽¹⁷⁾ もちろん屈辱は、加えるだけでなく、加えられるものでもある。他人を嘲笑の対象とする楽しみ、他人から嘲笑の対象とされる恐れは、大作家であれ町のチンピラであれ人間だれしもが共有している。しかし、他人を嘲ってそのままですむことはまずない。

1915年ロンドンのイースト・エンドで生まれたユダヤ系文学者エマニュエル・リトヴィノフは、精神の糧としてエリオットに心酔していたが、第2次大戦に従軍中ホロコーストの実態に接して、離散ユダヤ人意識の再点検を迫られた。エリオット初期詩集の戦後再刊本に依然として「ゲロンチョン」や「パーバンク／ブライシュタイン」が収録されていたことを、リトヴィノフは座視できなかった。彼は、1951年2月ハーバート・リード司会の下「現代芸術協会」で催された詩人の集いで、これら2つの詩のパロディーを朗読した。「T.S. エ

リオットへ」 という題である。

I am not one accepted in your parish./Bleistein is my relative, and I share/the protozoic slime of Shylock, a page/in Stürmer, and underneath the cities,/a billet somewhat lower than the rats./Blood in the sewers. Pieces of our flesh/float in the ordure on the Vistula.

.....

Yet walking with Cohen when the sun exploded/and darkness choked our nostrils,/and the smoke drifting over Treblinka/reeked of the smouldering ashes of children,/I thought what an angry poem/you would have made of it, given the pity.⁽¹⁸⁾

(大意) あなたの教区でわたしは招かれざる客です/ブライシュタインがわたしの親類ですし、/シャイロックと同じ原生動物的なヘドロをとともにかぶり/ナチ突撃隊機関紙ではともに戯画化され、方々の都市に潜みながら/ネズミよりも少々低いところで安宿を分かち合っています。/どぶのなかの血。仲間の肉片がウィスワ川の汚物のなかに浮かんでいます。…でもコーエンといっしょに歩いていて太陽が爆発し/暗闇が鼻孔をつまらせ/トレブリンカ上空を漂う煙から/くすぶっている子供たちの灰の臭いを嗅いだとき、/わたしは思いました、あなたに憐れあれば、この光景からどんな怒りの詩をつくったろうかと。

パロディーとはいえ、エリオットがユダヤ人に向けていた侮蔑への抗議と、トレブリンカで虐殺された同胞への連帯感が滲み出ている。リトヴィノフはこのパロディーを読みはじめ直前に、エリオットが出席していることを知らされ狼狽を禁じ得なかったし、⁽¹⁹⁾ 朗読後スティーヴン・スペンダーがエリオットの弁護に憤然と立ち上がる一幕もあったが、エリオットは部屋の後ろの方に座っていて、「いい詩だ、とてもいい詩だ」と呟いていたようだ。その1週間後エリオットは重病の床につき、リトヴィノフはその知らせを聞いてふさぎ込んだという話である。⁽²⁰⁾ リトヴィノフは他にも数々の小説や詩集を世に問うているけれども、『ユダヤ大百科事典』は、この「T.S. エリオットへ」を彼の「最も意味深い（‘most significant’）」作品とみなしている。⁽²¹⁾

「シュティンクシュルト（ことロスチャイルド）」他（エズラ・パウンド）

パウンドは複雑な多面体で、どの面を扱うか予め限定することが必要である。デニス・ドナヒューは、パウンドの特質として次の9項目をあげている。

(1)言語の駆使能力は驚くべきものである。(2)諸言語に通じているが、一流学者には及ばない。(3)いくつかの経済理論を掲げているが、いずれも明らかに理不尽で、奇妙で、時代遅れである。(4)他の面で彼が志向する道は、大まかに言えば、カトリック／ファシスト／反ユダヤそして中世風で、読者の多くはこれを残念がる。(5)さまざまな思想信念がごたまぜの塊りとなって、彼の詩の明澄な流れを妨げている。(6)才能を活かしているときは、素敵な叙情詩人である。(7)彼は思想家ではないし、思想体系の構築など目指すべきではなかった。(8)初期の彼は善を推進する力となったし、いまでも彼の作品に含まれた道徳的価値は、どこか異様な感じをともなうが、印象的である。(9)彼は、道を誤った良き司祭である。⁽²²⁾

ドナヒューは、上記9項目中の8番目に焦点を合わせ、「平凡人の世界」という視点も忘れずに『詩章』(*The Cantos*, 1975)に盛られた「印象的な」道徳的価値を論じている。筆者の対象は、論題からしてすでに4番目の項目に固定されており、「反ユダヤ主義」という「多くの読者から残念がられている志向」を取り上げざるを得ない。このようなアプローチが英文学界主流から反発を招くことは必至だろう。「道を誤った良き司祭」の「良き司祭ぶり」が圧倒的であり、同時に「道の誤り方」も圧倒的であったパウンドの場合、批評は分極化せざるを得ず、文学的天才としての彼を奉る側と、ファシスト兼反ユダヤ主義者としての彼を責める側の間には、冷戦を思わせる敵意さえ介在しているからだ。

1967年イタリアのラバッコでパウンドに会ったシリル・コナリーは、老詩人が失意と不安に陥り「俺の書いたものは全部くずだ。『詩章』には基本的な構造がない」と言い張るので、こう答えた——「もしあなたが存在していなかったら、イエイツは「イニスフリー」の詩でしか憶えられていないでしょうし、ジョイスはベルリッツ会話学校の教師で一生を終えたでしょうし、エリオットは銀行家のまま、ヘミングウェイはスポーツ記者のままだったでしょうし、孔

子、カヴァルカンティ、中世プロヴァンス詩を一丸とした東西合成は無期延期されてしまったことでしょう。あなたは世界に「新たな身も震えるような感動」(‘*frisson nouveau*’)をもたらし、海水の新しい見方を教えてくれたのです」⁽²³⁾

最後の「海水の新しい見方」というのは、たぶん『詩章』第2篇の「水は竜骨をはるかに下回り／波濤が船尾から前へとくだけ／航跡は船首から発した」

(Water cutting under the keel, / Sea-break from stern forrards / wake running off from the bow,) あたりを指すのだろう。⁽²⁴⁾ バウンドに対して最も厳しい批判を浴びせているアルフレッド・ケイジンですら、この箇所的前後をたっぷり引用して、「彼と同世代のモダニスト詩人中、物事の始源を呼び起す詩才や、ホメロスのような限で世界創造の驚異を探る能力というものを、彼ほど恍惚として自らの内部から引き出した者はいない」と感嘆している。⁽²⁵⁾ 人類の歴史から啓示的断片を次々にたぐり寄せ、永続的、反復的、偶発的な諸般の主題と絡み合わせながら、価値の序列を紡ぎ出す「コンメディア・アグノスティカ」(「不可知論的喜劇」)が彼の壮大な目標で、物事がたがいにどう関連し合うかを示唆することで、物事それぞれの説明がつくはずであった。しかし「日常的」なものが『詩章』に入り込む余地はなかった。ジェットコースターさながらに激しく上下動しながら古今東西の書物を博搜する彼の精神は、『詩章』のなかで自己没頭の極致に達したからである。

「アグノスティカ」を敢えて標榜したのは、キリスト教が道德的勢力として衰微し、「再生と信仰と歓喜の福音から遊離し、とりわけ異端の認容に赴くばかりか高利貸しにまで手を染めていた」からだろう。⁽²⁶⁾ 孔子(the Great Kung)、ジェファーソン、アダムズ、ムッソリーニなどが登場するのは、共通項として、いずれも時代の無知を克服し、その代わりに啓蒙と秩序を具現させるだけの存在感があり、とりわけ利潤追求に走る悪政の拒否者とバウンドの眼に映じたからだろう。イタリア敗戦を間近に控えてなお彼は、自費で「利潤追求は国家の利益にならぬ」とか「公正こそ国家の宝である」といった孔子語録のポスターを貼って回ったという。⁽²⁷⁾

偉人に対する賛美も壮大なら、彼にとって反価値たる人物や勢力にたいする罵倒も凄絶を極めた。一時は激しく好奇心を駆り立てられたのに結局彼を放逐してしまったイギリス人の面々は、戦時中の不当利潤追求の罪も問われて地獄へ突き落とされる。出版社の配慮で彼らの名前が削除されているのは、『詩章』

第52篇で「国際的詐欺」を働いたとして列記されたユダヤ人の名前が黒く塗りつぶされているのと同じである。「糞で甘くした血を飲んでいる謀利輩ども……そして言葉を裏切った奴ら……雇われて嘘をついた奴ら、言葉を墮落させたよこしまな奴ら、感覚の喜びよりも金銭欲に走ったよこしまな奴ら」⁽²⁸⁾——つまり作家、ジャーナリスト、政治家、マスコミ経営者などが、「無愛想な嘘つきどもの淵、愚鈍の沼……泥から流れる膿、害虫や、生きた蛆虫を産む死んだ蛆虫でいっぱいの膿」⁽²⁹⁾のなかでつき混ぜられる。

『ピサ詩章』第74篇では、ムッソリーニだけでなく愛人クララ・ペタッチの死体をも逆さ吊りにして辱めたイタリア人が、やはり「蛆虫」と目される。パウンドにとっては高利貸的慣行（‘USURA’）を除去する経済改革が主眼で、それを達成できるのはムッソリーニだけと信じ込んでいたから、ファシスト政権への協力にも力がこもった。しかしローマから電波に乗せた反英米の宣伝放送でも、日々の戦況など「日常的なこと」には無関心で、擬人化された「ウズーラ」を退治するという大目的のみが念頭にあったという。⁽³⁰⁾ 戦争の根本原因たる「ウズーラ」を根絶すれば世界は平和になるという彼の信念は、一種の平和主義だが、果してそう呼べるのか確認してみたい。

第2次大戦中 BBC でやはり海外向け宣伝放送に従事していたジョージ・オーウェルは、実際にパウンドの放送を傍受したわけではないが、その傍受報告を読んだ印象として「胸糞の悪くなるものだった」と述べている——「おそらく彼の情熱は、本質的には、イタリアの形態のファシズムに向けられたものだった。彼はそれほど強固なナチスびいきでもソ連ざらいでもなかったようであり、彼の根底にある真の動機は、イギリス、アメリカ、およびユダヤ人に対する嫌悪感だった。……少なくともわたしの記憶している放送のなかで、彼は東欧でのユダヤ人大虐殺を是認していたし、アメリカのユダヤ人に対しては、やがて貴様たちの番が来るぞと警告していたのだ。これらの放送は、精神異常者が行ったものだという印象をわたしに与えなかった」⁽³¹⁾ オーウェルのこの一文は、パウンドがポリングゲン賞を授かったことをどう考えるか、という『パーティザン・レビュー』のアンケートに答えたもので、パウンドの授賞に関しては、芸術と政治を区別した選考委員の立場に理解を示しながらも、「すぐれた文人だからという理由で彼の政治的経歴を容赦することがないようにしよう」と釘をさしている。⁽³²⁾

オーウェルは戦時中にも『トリビューン』に連載したエッセイのなかでパウ

ンドの宣伝放送にふれ、「それは、知的、道徳的にいやらしいものであった。たとえば反ユダヤ主義は、もともと大人の教義ではない。その類のものにいかれた人は、その結果に責任を負わなければならない」と言い切っている。⁽³³⁾ 1942年4月3日にローマから行った放送のなかでパウンドは「(ユダヤ人) 上層部のポグロム」が必要だと述べている——「しかし合法的な措置の方が好ましい。世界的な防疫措置として、この戦争を始めた60名のユダ公(‘kikes’)と、若干の熱狂的ユダ公および非ユダヤ的ユダヤ公をセントヘレナ島へ送ってもよからう」⁽³⁴⁾

パウンドが個人としての、あるいは芸術家としてのユダヤ人を排除しなかったのは事実である。弟子の詩人ルイス・ズーコフスキーを高く評価していたこともその一例だろうし、「エズラというユダヤ人の名前を持った男が反ユダヤ主義者にはなれんでしょう」と冗談も飛ばしている。⁽³⁵⁾ またアレン・ギンズバーグが1967年にヴェニスで彼を訪れたとき、「わたしの書いたものは、一貫して愚劣と無知だけだ……しかしわたしがしでかした最大の間違いは、あの愚かな、郊外で流行っている反ユダヤ主義の偏見だった。それが初めから一切を台無しにした」と自発的に悔恨の述懐もしている。⁽³⁶⁾ しかし82歳になってこのような告白をしたからといって、激烈な反ユダヤ的毒舌に終始した半世紀の「政治的経歴」が帳消しになるものでもない。戦時中にとった行動の理由として結局精神異常を挙げたのは、やはり逃げを打ったとしか考えようがない。

放送原稿やパンフレットの反ユダヤ的内容もさることながら、やはり彼が40年間営々と積み上げた中心的な作品たる『詩章』のなかで、ユダヤ人がどのようにあしらわれているか、具体的に確かめるべきだろう。まず第35篇を取り上げてみたい。筆者は数年前にたまたま「英語とイディッシュ語の相互作用」を研究テーマとしていたので、以下の一節がとくに目を引いたのである。

The tale of the perfect schnorrer: a peautiful chewish poy/wit a voice dot woult/meldt dh heart offa schtone/and wit a likeing for to make arht-voiks/and ven dh oldt ladty wasn't dhere any more/and dey didn't know why, tdhere ee woss in the/oldt antique schop and nobodty knew how he got dhere/and venn hiss brudder diet widout any bapers/he vept all ofer dh garpet so much he/had to have his clothes afterwards pressed/and he orderet a magnificent funeral and tden zent dh pill to dh vife.⁽³⁷⁾

(大意)「模範的居候の話。石の心をも／溶かすような声と／ゲイジュツ作品も手掛ける趣味を具えた／ハンサムなユダヤ男児がいました。／老婦人が亡くなったとき、／どういうわけか誰も知りませんでした、彼はちゃんと／あの骨董屋に収まっていたのです。どうやってか誰にも分からなかったけど。／彼の兄貴が遺書もなしに死んだとき、／彼は絨毯の上を転がりながら泣きまくったので、／後で服にアイロンをかけ直してもらったのでした。／そして彼は豪勢な葬式をさせ、／そのツケは兄貴の未亡人に回したのです。

濁音を半濁音と、あるいは清音と混同し、曖昧母音を「オイ」と発音し、w がv に変わってしまうユダヤ人の英語発音の癖をみごとに活かしているところは、流石に音感の鋭さを思わせる。しかし他民族の稚拙な発音を揶揄することは、その民族に対する侮蔑となる。これを読んで筆者が念頭に浮かべたのは、旧満州で日本の兵隊たちが朝鮮人娼婦を愚弄して歌った「討匪行」の替え歌である——「アメノシヨポシヨポフルパンニ、カラスノマトカラノソイテル／マテツノキボタンノパカヤロウ、サワルハコチセンミルハタタ……」この替え歌は、おそらく満鉄などに勤めていた日本人が植民地で暮らすのが身を自嘲し、その自嘲を朝鮮人娼婦に託して歌ったもの、というやや弁疏的な説明もあるが、やはり基調は驕慢な愚弄だろう。⁽³⁸⁾ パウンドも上の一節で、「居候的」「寄生虫的」存在であるユダヤ人を愚弄しながら、彼らがいかに狡くて偽善的であるか、を示唆している。

順を追って第48篇に移ろう。「ビスマルクは／南北戦争をユダヤ人のせい／とくにロスチャイルド家のせいにした／同家の一人はディズレイリにこう言った／国家なんて自分で保有している信用に賃借料を払うんだから馬鹿だねえ」⁽³⁹⁾ 銀行が信用として発行する貨幣は、政府が保証しているからこそ発行できる。つまり、銀行は本当の信用など持ち合わせていないのに、ロスチャイルドは逆に銀行で国家を操るつもりなのだ。「貨幣の用途を知らねばならない。貨幣を人捕り毆あるいは公衆の膏血を絞る手段と考えるなら、ロスチャイルド家や国際銀行業者が操っている銀行制度を讃えるがよい。……証券取引所を讃えるがよい」⁽⁴⁰⁾ 「ロスチャイルドやその同類は、黄金を売ろうと思ったら、必ずその値段をつり上げる。ドルであれ何であれ、犠牲として選ばれた国の通貨の価値が下がったと宣伝すれば、公衆は騙されてしまう。通貨が高値だと国の通商に有害だ、と言いくるめるわけだ」⁽⁴¹⁾ 「バリのロスチャイルド家私邸には、

爆弾にもガスにも耐えられる地下室があって、高利貸しの親玉が、あの破滅的で精神的腐臭を放つ都市から離れるときは、そこへ美術工芸品を（商業的、金銭的価値のあるものとして）運び入れるのだ」⁽⁴²⁾「ウズーラ」は文化的墮落を示す尺度である、ということだろう。

高金利主義（Usurocracy）は、負債の担い手を求めて連続的に戦争を起こさせる。南北戦争だけでなく、ナポレオン戦争も、第1次大戦もそうだったというのである。第50篇でも、バウンドはユダヤ金権の内幕を暴き続ける。「ウェリントンはさるユダヤ人のボン引きで／自分が何をしでかしたかに気づくだけの頭もなかった。／＜公爵なんか置き去りにして、金を求めよ＞」⁽⁴³⁾ ナポレオンの敗北によるイギリスとオーストリアの勢力伸長は、とりも直さず、高利貸しどもの金権増大につながったということだろう。「さるユダヤ人」とはネイサン・マイアー・ロスチャイルドのことで、事実ヨーロッパ諸国に張りめぐらされた同家の緊密なネットワークを活かし、パリ経由でウェリントンに軍資金を送り届けた。⁽⁴⁴⁾ ワーテルローからの捷報をイギリス政府よりも早く掴み、ロンドン証券市場で大胆な「買い」に出て大儲けしたのもネイサンであった。歴史上の一段階、一時代を築いた大資本としてのロスチャイルド商会も、やがて銀行・信用制度が厳しく調整されるなかで、かつての優位性や独創性を失い「シンボル」化してしまった。政治家や軍人を「ボン引き」に仕立てたとしてもそれは昔の話なのに、同じ理由で時代錯誤的にロスチャイルド家を諸悪の根源と決めつけるのが、反ユダヤ主義者に共通の傾向である。愛国的な軍人が命懸けで戦っているとき、金権亡者のユダヤ人は後方で安逸を貪る、というのも常套句の一つで、それをバウンドは、第80篇の次の2行で活用した——「ブルムがビデー（局部洗浄器）を守っていたとき、／ペタンはヴェルダンを防衛したのだ」⁽⁴⁵⁾

第52篇の上から8行目に‘neschek’という語が用いられている。「利息」を意味するヘブライ語「ネシェフ」（‘neshekh’）の読み違いだろう。この「ネシェフ」が、「必要な財貨」の公平な分配を妨げる「蛇」だというのである。その5行下に

————— sin drawing vengeance, poor yitts paying for

paying for a few big jews' vendetta on goyim

という一節が出てくる。⁽⁴⁶⁾ 黒く塗りつぶされた部分は -sin で終わる人名かと

思っていたら、そうではなかった。フェイバー社で『詩章 52/71』の原稿を受け取った T.S. エリオットが、中傷されるといけないから、ロスチャイルドの名前は省くか、音韻的に等価であるブライシュタイン(!)にしたかどうかと提案したのだ。⁽⁴⁷⁾ 原稿は「ロスチャイルドの罪が復讐を引き起こし、貧乏なユダ公どもがロスチャイルドの償いをしている／一握りの大物ユダヤ人が異邦人相手にしかけた仇討ちの償いをしている」となっていた。パウンドはエリオットへの返信のなかで「こん畜生（‘blast you’）、レプロシー（癲病）やシフィリス（梅毒）をくスモールボックスと綴ることに何の意味があるんだ。出版社が責任をとりたいんなら、blankにするか、中黒のポツを10個並べりゃいい」と応じている。⁽⁴⁸⁾

ヒュー・ケナーもこの箇所を引用しているが、‘Rothchild’が‘Stinkschuld’（「罪の臭う男」）となっている。ケナーは明らかにパウンドの弁護を試みている——「ヒトラーはロスチャイルド家の者を投獄しなかった。だからパウンドにしてみれば、ドイツ人の怒りにふれて強制収容所へ駆り立てられた哀れなユダヤ人は、同宗のお偉方が犯した罪ゆえに苦しんでいる、と思われた。だから同じページの中で、＜シュティンクシュルトの特技たる国際的詐欺＞に非難を浴びせるのだ……パウンドがまだ金融業者とそれ以外のユダヤ人とを区別する習慣を保っていた間に、その区別を強調する機会が与えられなかったことは残念だ。正誤のほどはともかく、この2行は分析の試みであり、それも反ユダヤ主義を促すよりむしろ減らす傾向のものだ。実際彼は＜人種の偏見なんて、燻製ニシン（‘a red herring’）のようなものだ＞と1937年に書いている」⁽⁴⁹⁾（この場合「燻製ニシン」とは、反ユダヤ主義の悪臭で真の巨悪たる「ウズーラ」を嗅ぎつけられなくなっている、という意味だろう）。さらに脚注として、「1938年現在、強制収容所はまだ絶滅政策の段階に入っていなかった。その政策が実施されたという報道は、ドイツの大半におけると同様、（パウンドが住んでいた）ラバッコにも達していなかった」と付け加えている。

ケナーに対する反論として印象的だったのは、ケイジンが1986年に発表した「エズラ・パウンドの魅力と恐ろしさ」である。ケイジンの論文はその前半を「魅力」に割いているのだから、「恐ろしさ」の分析もそれだけ納得が行く。彼は、戦時中ロスチャイルド家の人々が、下々の哀れなユダヤ人（‘poor yitts’）と比較を絶するほどの特権を享受していたことはない、と述べている。たしかにバリ・ロチルド家の嫡男ギュイの自伝によれば、彼は軽機甲師団の一将校と

して「敵（ドイツ軍）の激しい銃火を浴びながら中隊の先頭に立って反撃した」という感状とともに勲功賞を授与されている。⁽⁶⁰⁾ ギュイの従兄弟アランとエリーもマジノ線の戦闘でドイツ軍の捕虜となったし、⁽⁶¹⁾ 彼の母方のほとんどが強制収容所で死亡したという。⁽⁶²⁾ この自伝の第7章「ベタン政権下のユダヤ人」は次の一文で終わっている——「生得の社会的特権という表面の下では、わたしは、他のユダヤ人と同じように一人のユダヤ人であるに過ぎず、それ以上のものではあり得なかった」⁽⁶³⁾

さらに脚注の部分も、「ホロコースト」の実態をもしパウンドが知っていたら、彼の反ユダヤ主義的罵倒はもっと「減って」いただろうという含みだが、先に挙げたオーウェルの証言からしてもそれは疑わしい。「燻製ニシン」の悪臭を彼自身が放っていることは、常套的な「ロスチャイルドいじめ」によって銀行家を銀行家としてでなくユダヤ人銀行家として攻撃していることから否めない。似而非ヘブライ語やイディッシュ語をわざと嘲笑的に用いるのも、旧套の一つである。

同じページの10行下にも、反ユダヤ的な一節が続く。

Remarked Ben: better keep out the jews/or yr grand children will curse you/jews, real jews, chazims, and *neschek*/also super-neschek or the international racket⁽⁶⁴⁾

（大意）ベン（ジャミン・フランクリン）は言った、ユダヤ人を追い出したほうがいい／ユダヤ人、本物のユダヤ人、豚ども、そして金権や超金権つまり国際的詐欺をだ／さもないと子孫に呪われるだろう／……

フランクリンがユダヤ人追放を説いたというこの箇所は、反ユダヤ主義が隆盛を極めた1930年代初めのアメリカでファシストの W. D. ベリーがでっちあげたデマを蒸し返したもので、フランクリンの伝記を書いたカール・ヴァン・ドーレンらによって1934年に捏造として暴露された。⁽⁶⁵⁾ 知っていて故意に蒸し返したとすればベリーと同水準であり、知らなかったとしたら、ヘブライ語 ‘*khazerim*’ (‘*pigs*’) を ‘*chazim*’ と綴って口を拭いている無責任な知的粗暴のなせる業である。パウンドが抱いていたユダヤ人社会の全体像は、第35篇の次の一節に窺えよう。

this is Mitteleuropa/and Tsievitz/has explained to me the warmth of affections,/the intramural, the almost intravaginal warmth of/hebrew affections, in the family, and nearly everything else.....

It must be rather like some internal organ, / some communal life of the pancreas.....sensitivity / without direction.⁽⁵⁶⁾

ツィエヴィッツとは人名でなくポーランドのユダヤ村のことかもしれない。そこで分かったことは、「家庭内といわずほとんどどこにでもある愛情の温もり、ヘブライ人の愛情の壁内的いや腔内的ともいえる温もり」だということだ。それは内臓器官というか、脾臓同士の共同生活みたいなもので、体液が皮膜に「浸透」してそこに相互混在の状態が生じ、「感覚に方向性がなくなる」それが「定かならぬ全般的なふらつき」(‘the general indefinite wobble’) で、⁽⁵⁷⁾このような煮え切らない、強さも実質もない無方向性こそリベラリズムやヒューマニズムやデモクラシーの論理的結果だ、というのがパウンドの信念だろう。(たぶん T. S. エリオットも同意見だろう。) 芸術では新古典主義、政治ではファシズムといった大きな方向感覚が必要と彼は考えた。西欧社会の知的伝統を根底から揺るがしたのはデモクラシーの興隆であり、その興隆で頭角を現したのがユダヤ人思想家だった。

「民主勢力は下水溝への道を選んだ……1913年からは糞の流れで、それを流したのは、その勢力のユダ公ども(‘kikery’), マルクス, フロイトそしてアメリカの低級な連中だ」——これは1955年パウンド70歳のときに刊行された第91篇の一節である。⁽⁵⁸⁾これは思想の問題で、個々のユダヤ人に対する彼の心情とは無関係だ、と弁護することもできよう。『ピサ詩章』第80篇(1948年刊行)に、「溢れ出る涙で溺れそうだ／悲しみよ、お前を知るのが遅すぎた／60年間青年のようにわたしは苛酷だった」と悔恨の一節があり、⁽⁵⁹⁾第93篇(1955年刊行)では「同情」(‘compassion’) という語を4行にわたって繰り返したあと、「わたしも他人を憐れんだことはある／不十分に、不十分にだ(‘Pas assez! Pas assez!’)」と自責もしている。⁽⁶⁰⁾「シュエツィンクシュルト」の類や「民主勢力のユダ公ども」は別として、「哀れな下々のユダヤ人」(‘poor yitts’) はそのような悔恨や自責に与かったのだろうか。パウンドは、理性主義、暴力否認、契約尊重から「ヘブライの愛情の温もり」までユダヤ人の長所を悉く唾棄し、とりわけ事業に成功したユダヤ人の理性的商行為をもっぱら「ウズーラ」に起因させた。ユダヤ人の金儲けの汚さだけを取り上げ、金放れのよさはまったく意に介しなかった。黒インキを数滴コップ一杯の水に垂らしたようなもので、反ユダヤ的偏見はパウンドの人間と思想に染みついていた。「哀れな下々のユダヤ人」が彼の「同情」を惹いたことは認めよう。しかし、まともな

人間として扱ってもらえたかどうかは疑わしい。

パウンドを評価する際、中心的問題となるのは、やはり形式と技法を内容と意味から切り離して考えられるか、という点だろう。結局切り離せるという判断があったから、『ピサ詩章』はポリンゲン賞を得た。しかし、ピーター・ヴィーレックが指摘したとおり、「詩に対する読者の反応というものは、いわば全体的反応であって、美的要因だけでなく、倫理的、心理的、歴史的要因が不可分に溶け合う〈ゲシュタルト〉のようなものである」⁽⁶¹⁾ 美は、美を含んだより大きなものから抽出されなければならない。われわれが歴史から知り得るものと、パウンドが歴史として示すものとの間には大きな隔たりがあり、もしパウンド研究が彼の弁護に終始し、モダニズムの巨匠が侮蔑したものをわが事のように侮蔑するとしたら、文学研究の信頼性が疑われるかもしれない。

ワグナー愛好者にも、純粋な音楽家として彼を愛好する「温厚派ワグネリアン」と、彼のゲルマン至上主義や反ユダヤ主義まで継承する「強硬派ワグネリアン」がいるという。昨今、強硬派パウンディアンを以て自任すれば厄介なことになる。したがって、パウンドのファシズムは敬遠するけれども、T.S. エリオットから「わたしにまさる言葉の匠」(‘il miglior fabbro’)と讃えられた大詩人パウンドは「純粋に」愛好したい、と考える「温厚派パウンディアン」が多数を占めるだろう。ファシズムと反ユダヤ主義の歴史を知った上で、なおもその歴史を文学の外辺とみなし、『詩章』の技法、その力と美にひたすら傾倒していればよいと主張できる人は、「文化病」を疑われても致し方あるまい。

レオポルド・ブルーム (ジェイムズ・ジョイス)

近代英文学の小説に描かれたユダヤ人像是、シャイロックを祖像として『アイヴァンホウ』のアイザックや『オリヴァー・トウィスト』のフェイギンにつながって行く強欲な高利貸しの系列を主とするが、それと表裏をなすのは、「彷徨えるユダヤ人」を祖像として詩ではコウルリッジの「老水夫」、小説では M.G. ルイス作『ザ・マンク (修道僧)』やデュモアリア作『トリルビー』に登場する怪異な悪魔ないし魔術師につながって行く系列だろう。「彷徨えるユダヤ人」の本尊アハシェラスは、ゴルゴタへ向かうイエスをなぶった罰として、キリスト再臨の日まで永遠に地上隈なく放浪する宿命を負わされた。当

初この祖像は、異端ユダヤ人の排除を示唆する象徴とみなされ、それが黒魔術師としてのユダヤ人像と重なったとき、一層の凄味が付け加わった。しかしこの呪われた彷徨者の姿は、一部ロマン派詩人の手で現存の秩序に対する反抗、自発的な流浪の象徴に仕立てられ、たとえばシェリー作『縛めを解かれたプロメテウス』では、ミルトン作『楽園喪失』のサタン像とも共鳴しつつ、暴君的な主神ゼウスに逆らう人類の守護神へと変容する。（もちろんこの好転の次には暗転が待ち受けており、チャールズ・ウィリアムズ作『万聖節』では、またもや黒魔術の絶滅の道具立てに用いられる。）

「彷徨えるユダヤ人」像が理想化されたのと同様、「シャイロック」像を打ち消すような老若男女さまざまな模範的な善きユダヤ人が描かれてきた。その筆頭は何といっても G. エリオット作『ダニエル・デロンダ』の同名の主人公だろう。つまりユダヤ人像のどちらの系列にも悪役とヒーロー、悪魔と天使の対照があり、中間の日常的現実を活写する試みがなかった。

真のユダヤ人像が西欧人の精神内部に定着したのは、やはりソール・ペロウやバッシュヴィス・シンガーといった「ユダヤ系作家」が世界文学の一角に揺るぎない地位を占めてから以後のことだろう。しかし、1922年に刊行されたジェイムズ・ジョイス作『ユリシーズ』のなかで、明らかに「彷徨えるユダヤ人」像の系列につながりながらも、中世的な迷信・恐怖やロマン派的熱狂の対象でなく、生身のエヴリマン的ユダヤ人がすでに登場していた。思考言動ともに煮え切らないユダヤ人レオポルド・ブルームが1904年6月16日の一昼夜、ダブリン市内のあちこちで繰り広げた外的・内的経験を、細大漏らさず把握し、その一つ一つについて、タルムード風に、つまり単純な文字通りの意味からそこに隠れている新しい意味を果敢に演繹して行ったのである。この作品は、主人公がユダヤ人であるばかりか、手法までユダヤ人の学風を漂わせている。

とくに第17挿話「イタケー」の問答体などは、いかに瑣末な事柄でも忽ち純理論的な問題に仕立て上げる『タルムード』とくに「ゲマラ」の部分を彷彿させる。『タルムード』の中心部分は口伝律法で「ミシュナ」と呼ばれ、それに歴代の学者が連綿と加え続けた注解と議論が「ゲマラ」である。その切磋琢磨の副産物として、どんな前提からでも次々に系を作り出して行ける卓抜な論理的思考能力が培われ、また討議の過程で連想や譬喩の利用が勧められたから、柔軟な想像力も養われた。「ゲマラ」を彷彿させると述べたので、一つだけ例を挙げてみよう。ブルームがココアを入れるために蛇口をひねって水を出す。

何の変哲もない水だが、話はダブリンの水道施設、その貯水池、配管、不正使用例から始まり、次いで水の普遍性、「民主的平等性」、その様態、運動、効能、毒害、さらには登場人物と水の相性に至るまで延々3ページの敷衍が続く。⁽⁶²⁾「ゲマラ」顔負けといつてよい。ジョイスの蔵書中に、ドイツ語のタルムード解説書が含まれており、⁽⁶³⁾ブルームも『タルムードの哲学』という仮綴じパンフレットを持っていたのだから、⁽⁶⁴⁾『タルムード』がユダヤ的倫理のソースブックとしてだけでなく、その緻密な言語分析、鋭敏な論理展開、深遠な解釈、巧妙な比喩を介して『ユリシーズ』創作に寄与したと言っても、誇張にはなるまい。

ブルーム像の成立にモデルとして寄与したのは、寝取られ亭主と噂されたダブリンの一ユダヤ人で、身辺や性格の細部は、同じくユダヤ系でジョイスと親しかったトリエステ在住の作家イタロ・ズヴェーヴォことエットーレ・シュミッツに負っているというけれども、ブルームの思念の大半はジョイスの自我を表出したものだろうし、モデルが誰であれ、作者の想像力で完膚なきまでに鉋直されたはずだ。ブルームがそこはかとなく魅了され「息子」にしたいとさえ思っている芸術家志望のアイルランド人青年スティーヴン・ディーダラスは、ジョイスが蟬脱した若き日の自我を再構成したものだろう。

ブルームは38歳で身長が180センチ強、肥満体で、顔立ちが東洋風、皮膚がオリーブ色、黒のスーツを着ており、⁽⁶⁵⁾一日に数回「ミズラッハ」つまりエルサレムの位置とされる東方を凝視するというから、⁽⁶⁶⁾これで顎髭を生やして頭蓋帽をかぶれば、東欧ユダヤ人のラビとして通りそうだ。

父はハンガリー出身の正統派ユダヤ教徒だったが、アイルランド人女性と結婚するためプロテスタントに改宗し、姓をヴィラーグからブルームに改めた。改宗改姓その他正統派にあるまじき異文化への同化行為を重ねて「進行性憂鬱症」さらには発作的神経痛をこじらせ、18年前に服毒自殺している。⁽⁶⁷⁾ブルーム自身も、妻モリーと結婚するためカトリックに改宗するまでプロテスタントのままだったから、生後8日目に施される割礼（ミラー）、満13歳で迎える成年式（パール・ミツヴァー）といったユダヤ教徒として絶対不可欠な通過儀礼を経ていない。おまけに正統派では、父がユダヤ人でも母が非ユダヤ人の場合、その子供はユダヤ人として認められないから、ブルームは「本物」のユダヤ人とはいえない。

彼はバターで炒めた豚の臓物が大好物だが、不浄な豚肉を食べることは勿

論、肉と乳製品の混食も（近親相姦の象徴として）ユダヤ教の厳禁事項だ。実は彼自身、亡父を追憶しながら、この戒律や、割礼と安息日の信仰簡条を「軽蔑的に扱った」ことで悔恨の念に駆られている。⁽⁶⁸⁾ また浜辺で美少女の下半身に見とれ自慰に耽るというのも、⁽⁶⁹⁾ フィリップ・ロス作『ポートノイの不満』に横溢している性意識過剰がユダヤ人社会の掣轡を買ったように、ユダヤ人らしからぬ不潔行為とされよう。そんな彼が、うろ覚えながら断片的なヘブライ語を口走ったり、折にふれ一知半解ながらユダヤ教の教義や行事を持ち出すのは妙な話だけれども、周囲が排他的で、ことごと自分のユダヤ性を思い知らされていれば、否応なしにユダヤ人意識は根づいてこよう。

不幸というものは、はた迷惑になるから、その存在からしてすでに罪惡である。しかもユダヤ人の不幸は呪われた歴史的所与の結果とされていたので、周囲の迫害に対して同レベルの情動的反応、いわんや暴力行使で対抗するわけにはいかない。暴力否認と理性主義から生まれた状況倫理の基調は、遠慮と辛抱と沈黙であり、他人を傷つけるよりは黙って傷つけられる方を選ぶ寛容、弱い者を憐れみ助けの手をさしのべる優しさである。不浄食と性意識過剰が常習となっているブルームを「善きユダヤ教徒」と称するのは無理だが、寛容と優しさを体現している彼は疑いなく「善きユダヤ人」であり、ユダヤ人として心得るべきユダヤ教のミニマム・エッセンシャルズは一応マスターしている。

たとえば第17挿話の最後の方で「蓄積された疲労に関して、いかなる過去の連続的諸原因を無言のうちに列挙したか」という問いがあり、答えは朝食から夜間散策までユダヤ教の行事に照応した形で出ている。朝食は「燔祭」、沐浴は「ヨハネの聖儀」（これは洗礼者ヨハネをさすから、むしろキリスト教に近い）、図書館訪問は「聖地」、河岸沿いの古本漁りは「シムハット・トーラ」即ちトーラ感謝祭、オーモンド・ホテルでの音楽は「シーラ・シリム」即ち「雅歌」、キアナン酒場における莽猛な穴居人類との口論は「ホロコースト」、淫売窟訪問と街頭での口論と喧嘩は「ハルマゲドン」即ち世界終末戦争、「馭者溜り」までの夜間往復散策は「贖罪」という具合で、⁽⁷⁰⁾ ユダヤ教徒の生活様式と思考パターンはまちがいにブルームの一部となっている。ユダヤの血を一滴でも授かったが最後、終生ユダヤ人意識から逃れるわけには行かない。

ユダヤ人の血を一滴も授かっておらず「ケルト的頭脳」の持ち主であるはずのジョイスが、「ユダヤ的頭脳」の持ち主であるはずのブルーストやカフカよりもむしろ巧妙にユダヤ人の行動に固有のパラメーター群を駆使して、スワン

やヨーゼフ K よりも「ユダヤ的」なブルームを生み出したのだから驚く他はない。『ユリシーズ』を読んだユダヤ人なら、だれもがブルームを仲間のユダヤ人と認めたはずだ——レズリー・フィードラーもそう断言している。⁽⁷¹⁾ 1937年にジョイスが「ダブリンで『ユリシーズ』を読んでいるのはどういう人だろう」とベケットに尋ねた。ベケットが何人かの名前を挙げたら、ジョイスは「何だ、みんなユダヤ人じゃないか」と言ったそうだ。⁽⁷²⁾『ユリシーズ』に熱烈な関心を寄せるユダヤ系の作家や評論家が少なくないのは、文学的魅力もさることながら、地域を超えたユダヤ的な「ディアスポラ」体験の特質が、主人公ブルームに余すところなく表象されているからだろう。

ソール・ペロウ作『ハーゾグ』の主人公モーゼス・ハーゾグは、『ユリシーズ』に登場するユダヤ人雑貨商の名前でもある。第12挿話の冒頭で言及されるほんの脇役だが、極上茶と白ざらめ砂糖多量の代価を踏み倒され、雇った取立人にも嘲られている犠牲者の一人である。ペロウが描く大学教授のハーゾグはその雑貨商よりむしろブルームに似通っており、学識や身分で大差こそあれ、妻をやはりエージェント風の気取り屋に寝取られ、その懊悩でノイローゼに陥っている。内的独白や書簡の形式でハーゾグの1週間に及ぶ思索を綴ったのがペロウの小説で、「意識の流れ」技法だけでなく、ともに主人公が「愛」を強調し、妻の不倫に「寛容」なところまで、ジョイスの影響は濃厚である。ジョイスを取り上げた批評家の顔ぶれも、リチャード・エルマン、ハリー・レヴィン、レオン・エイデル、マーク・シェクナーなど、ユダヤ系が目立つ。

なぜこれほどまでに、ジョイスとユダヤ人との間に親和力が働いたのだろうか。ジョイスは幼少の頃から、アイルランド救国の大政治家バーネルを崇敬していた。そのバーネルが、ユダヤ人をフォラオの桎梏下から救出したモーゼと、同胞に裏切られた点まで似通っているとされ、またパレスティナとアイルランドの対比も、当時のダブリン政界では慣例となっていたから、⁽⁷³⁾ ジョイスのユダヤ人に対する関心は相当年季が入っていたとみるべきだろう。彼がダブリンと訣別した近因は、カトリックの独善的禁圧体制や、アイルランド文芸復興運動の偏狭な愛国主義的雰囲気に対する反発だとされている。それに教会を否定した結果、愛人ノラ・バーナクルと司祭の下で結婚する道は閉ざされていた。「わたしは自分の現在の状況を自由意志によるエグザイルとして受け入れるようになりました」とジョイスは出国した翌年に述べている。⁽⁷⁴⁾ 故国を棄てはしたが、故国のことだけを書き続ける。これは、離散ユダヤ人がイスラエル

に寄せる思いとよく似ている。そこに住む気はないが、関心の焦点はそこにある。離散という孤独で不安定な境遇を共有する者同士の間には、おのずと相互理解が生じる。トリエステであれ、チューリッヒであれ、パリであれ、ジョイスが滞在したどの都市でも、彼は意気投合できる教養豊かなユダヤ人の親友に事欠かなかった。しかも彼らは、深く係わっていたユダヤ教から離れ去るという、ジョイスとカトリックの関係によく似た内面的経験を積んでいた。

ジョイスにとって、ユダヤ人が置かれている客人的、周辺的狀況は、彼自身が置かれていた状況に他ならなかった。ユダヤ人が民族的な誇りを失わずに生存して行ける方途は、強者の道徳的弱みに弱者の道徳的強みで対応するという倫理性であり、その倫理性の源泉たるユダヤ教の経典、とくに包括的な学問体系としての『タルムード』にジョイスが興味を惹かれていたこと、その倫理性、論理性だけでなく文学性にも眼を光らせていたことは、先述のとおりである。もう一つその眼光炯々の実例をあげると、チューリッヒでユダヤ人の友達と散歩中に政治的順応の問題を論じながら、彼はこんな引用をしている——「くわれわれユダヤ人はオリーブのようなもので、潰されているとき、茂った葉の重圧で崩れてしまうときに最も良い成分を出す」と『タルムード』に書いてあるよ」⁽⁷⁵⁾

ジョイスにユダヤ学の知識を吹き込んだ連中としては、先述した作家のイタロ・ズヴェーヴォやシオニストのモーゼス・ドルーガッツなどが考えられる。このドルーガッツは第4挿話「カリュブソー」に「いたちのような眼をした豚肉屋」として登場する。ブルームはこの豚肉屋の包装用新聞紙（おそらくはシオニストの機関紙）で、ガリラヤ湖畔の植樹会社の投資勧誘広告を読み、イスラエルのシトロンの「甘い、野性の香り」に想いを馳せるが、その白昼夢は、通りかかった老婆のお蔭で、「灰色の陥没した世界の陰門」つまり死海の荒廃へと転落して彼を「ちぢみあがらせた」⁽⁷⁶⁾ しかしブルームは、どのユダヤ人とも同じく基本的にシオニストなのである。第17挿話で、ケルト、ユダヤ両民族の間にいかなる接点が存在したか、という問いに、「シオンにおけるダビデ王国の復興とアイルランドの政治的自治の可能性」を挙げ、「その集合的な…究極状態を期待して」ブルームは、「ハティクヴァー（希望）」を歌う。⁽⁷⁷⁾（彼が「不完全な記憶技術の結果として」思い出せなかった後半部の歌詞は、どっちみちイスラエル建国つまり「究極状態」が実現して「ハティクヴァー」が国歌に制定されたとき変わってしまった。）

このようにユダヤ人意識は健在だが、ブルームはできるだけそれを表面に出さないようにしている。ちょうどドレフュス事件の主人公が終始自分はアルザス出身でフランス陸軍の大尉であると言い張ったように、ブルームも「わたしはアイルランド人です」と念を押す。ちょうど『ユリシーズ』執筆のころ、そのドレフュス事件をきっかけとしてヨーロッパ中に反ユダヤ主義が広まり、その結果ユダヤ人の間でシオニズム運動が興りつつあった。ジョイスが『ユリシーズ』の主人公にユダヤ人を据えた一因は、周囲の反ユダヤ主義的趨勢に対する反発かもしれない。ブルームのユダヤ人意識が反射的に喚起されるのは、やはり「アイルランド人です」と言ってもそれを受け容れてもらえないときだ。

キアナンの酒場で、ブルームは「市民」という仇名の盲目的愛国主義者からまれる。「ところでお前さんは何国の人なんだい?」「アイルランドですよ。わたしはここで生まれました。アイルランドで。……それにぼくは、忌み嫌われて迫害されている民族に属してもいます」ブルームがユダヤ人に加えられた不正を語ると、「市民」の相棒が「だったら、男らしく力で対抗しろよ」とけしかける。「いや、そんなものは何の役にも立ちません。力、憎しみ、歴史、そんなものはみんな。男にとっても女にとっても、侮辱や憎しみは生命ではない。本当の生命はそれと反対のものだってことは、誰だって知っています」もう一人の相棒が「つまり何だね」と聞く。「愛です。憎しみの反対ですよ」⁽⁷⁸⁾

勇猛だが優しさに欠け、おとなしい人間をゆえなく虐げる「マチョ」的価値観は、たしかに先述した離散ユダヤ人のそれと背馳するから、「市民」のようなごろつき連中に愛を説いたブルームはりっぱなユダヤ流紳士つまり「メンシュ」である。妥協と寛容を旨とし、両性具有的、嗜虐的でさえある彼も、周囲の罵詈雑言で平静を失ったか、最後に「市民」たちに向かって「お前らの神はユダヤ人だったんだぞ。キリストもおれ同様ユダヤ人だったんだぞ」と捨てぜりふを残し、あやうく「市民」にビCKET 缶で頭を叩き潰されそうになる。

ブルームとスティーヴン・ディーダラスは、ともにジョイスの分身だから、反ユダヤ主義者の扱い方は、スティーヴンの方も鮮やかである。彼の上司たるディー・ジョージ校長が陰謀や裏面工作の話からユダヤ人に矛先を向けはじめる——「イギリスはユダヤ人どもの手に落ちとるのだ。有力な地位はみんな奴らが占めておる。財界も、言論関係もな。……ユダヤの商人どもがすでに破壊作業にとりかかっていることは確かなのさ」「商人ってものは、安く買って高く売る人間でしょう。ユダヤ人でも、キリスト教徒でも」「奴らは光に背きおった、

奴らの眼には暗闇がひそんだ。だからこそ今日まで地上をさまよい歩いておるのだよ」「誰だってそうじゃありませんか。……歴史は悪夢です。ぼくはその悪夢から覚めようとしてるんです」⁽⁷⁹⁾

このスティーヴンは、夜の歓楽街で泥酔したイギリス軍兵士に殴り倒されて気絶するが、気づかっていたブルームに助けられ、「夜間散策」をしながらイタケー挿話の問答に入る。ブルームがスティーヴンに執着するわけは、自民族の精神的遺産を是が非でも息子に継承させたい、というユダヤ人男性のほとんど本能的な衝動にありそうだ。彼は、生後11日目に死んでしまった息子ルーディの身代わりに、スティーヴンと精神的な親子関係を結びたく思っている。ペロウの『ハーゾグ』では知能的原理と官能的原理が主人公のなかでうまく融合していたが、『ユリシーズ』ではともにジョイスの分身たるブルームのユダヤ性とスティーヴンのケルト性がどうも共鳴し合わない。

先述の「ハティックヴァー」をブルームが歌ったとき、スティーヴンはその「深い古めかしい男らしい耳なれない旋律のなかに過去の蓄積を聞きながら」どうやら中世イギリスのユダヤ人観に逆行してしまったようである。彼は「同系の主題による奇怪な物語詩」を歌うように勧められたとき、俗謡のなかでもこの上なく反ユダヤ的な「ユダヤの娘」を歌ってしまう。これは、兩人の不可避的隔絶が暗示された衝撃的な一節である。みどりの服を着たユダヤ娘が、キリスト教徒の幼いヒューズを家のなかに誘い入れて首を掻き切ったという「血の中傷」民謡のもじり歌で、「ユダヤの娘」が振り上げたナイフは、シャイロックやフェイギンが振り上げるナイフにつながり、悪魔的ユダヤ人の原像をなしてきた。スティーヴンは「犠牲者が自らの宿命を挑発した結果」という冷淡でお高くとまった注釈を下すけれども、ブルームは「自分で行ってもない行為を語ることもなかりうに」と悲しむ。⁽⁸⁰⁾

泊まっていきなさいというブルームの申し出をスティーヴンが断るのは、芸術家として保護的存在に精神的去勢を強いられたくないという意思表示だろうが、半面ユダヤ人とはちがって、生まれ落ちた伝統からいつでも逃げ出せるという暗示かもしれない。もし両者が歩み寄っていたら、ブルームの学問的野心はスティーヴンによって満たされただろうし、他方スティーヴンも実父には求められなかった人間的な温かみをブルームのなかに見出せただろう。しかし兩人の出会いは束の間であった。兩人を比較するとき、ブルームの方はユダヤ系だし、いかに美化しても所詮「官能的な平凡人」(‘*homme moyen sensuel*’)

だが、スティーヴンの方は「ケルト系」でしかも「知能的な非凡人」(‘*homme supérieur intellectuel*’)だから、どうしても醜い親と美しい娘という『ヴェニス商人』や『アイヴァンホウ』で目立った対照を思い出してしまう。となれば、ユダヤ人の主役として空前の「エヴリマン」たり得たブルームでさえ、微かな脈絡ながら、シャイロックやアイザックとつながってしまうのではないか。

「ユダヤ人」という言葉には、永遠の衝撃がこもっている。この衝撃を表わすには、並外れた美德もしくは悪徳をその衝撃の主に帰する他なかった。ヨーロッパ文学のユダヤ人像が神話的と称されてきた所以である。20世紀に入ってジョイスが、神話化されたユダヤ人像を主人公にかぶせることなく、美德、悪徳といった二分法を超えて、平凡なユダヤ人を平凡な非ユダヤ人と同列に「並みの人」として描き出した。「並み」がいかに「並外れ」であるかを晒け出すのが『ユリシーズ』の真骨頂だから、当然ジョイスは主人公の精神内部に滲み込んだユダヤ的特質を逐一掘り下げる。同時に、異端と目される「並外れた存在」を「並み」の同胞の間から排除しようとする本能に近い敵意が、「市民」一般に潜在もしくは顕在していることを、勿論彼は見逃さなかった。英雄詩もじりのコミカルな文体と登場人物の赤裸々な相互関係から浮かび上がるのは、やはり「並みの人」ブルームさえも「並外れた存在」にしてしまうユダヤ性の「永遠の衝撃」ではなからうか。

(付記) この論文は、『法政大学教養部紀要』第81号(1992年)所載「中・近世英文学にみるユダヤ人像(1066—1600)」と、同紀要第85号(1993年)所載「近代英文学にみるユダヤ人像」の続編となるものです。

《注》

- (1) 深瀬基寛、『エリオット』(筑摩書房、1968) pp. 99-100.
- (2) 同上, pp. 123-24.
- (3) 同上, p. 148.
- (4) ビーター・アクロイド著、武谷紀久雄訳、『T. S. エリオット』(みすず書房、1988) pp. 303-4.
- (5) Leslie Fiedler, "What Can We Do About Fagin?" (*Commentary*, May 1949) p. 412.
- (6) 田村隆一編、『エリオット詩集(世界の詩43)』(弥生書房、1967) p. 123.
- (7) 中橋一夫訳、「異神を追いて」『エリオット選集第3巻』(弥生書房、1959) p. 23.
- (8) この箇所訳は、同上選集第4巻所収の安東次男訳に拠った(p. 60)。

- (9) 同上安東訳, pp. 63-4.
- (10) Harry Stone, "Dickens and the Jews" (*Victorian Studies*, vol. 11, no. 3, 1959) p. 223.
- (11) Christopher Ricks, *T.S. Eliot and Prejudice* (Faber & Faber, 1988) p. 61.
- (12) T.S. Matthews, *Great Tom* (Harper & Row, 1973) p. 163.
- (13) Irving Howe, "An Exercise in Memory" (*The New Republic*, March 11, 1991) p. 30.
- (14) Letter to J.V. Healy (19 June, 1940) as quoted in Ricks, *op. cit.*, p. 54.
- (15) Letter to J.V. Healy (10 May, 1940) as quoted in *ibid.*, p. 44.
- (16) Ricks, *op. cit.*, p. 206.
- (17) as quoted in Howe, *op. cit.*, p. 29.
- (18) as quoted in Harold Fisch, *The Dual Image* (KTAV, 1971) p. 108.
- (19) Matthews, *op. cit.*, p. 113 footnote.
- (20) アクロイド著, 武谷訳, 前掲書, p. 350.
- (21) *Encyclopaedia Judaica*, vol. 11, p. 405.
- (22) Denis Donoghue, *The Ordinary Universe* (The Ecco Press, 1968) p. 291.
- (23) Cyril Connolly, *The Evening Colonnade* (HBJ, 1973) p. 216.
- (24) 新倉俊一訳, 『エズラ・パウンド詩集(双書・20世紀の詩人2)』(小沢書店, 1993) p. 71. 原詩は, Ezra Pound, *The Cantos* (Faber & Faber, 1975) pp. 7-8.
- (25) Alfred Kazin, "The Fascination and Terror of Ezra Pound" (*The New York Review of Books*, March 13, 1986) p. 17.
- (26) Mary de Rachelwitz, "Ezra's <Kung>", 福田・安川編『エズラ・パウンド研究』(山口書店, 1986) p. 22.
- (27) *ibid.*, p. 23.
- (28) Canto XIV, p. 61. 以下『詩章』からの引用は, 第何編かを表すローマ数字と Faber & Faber 版のページで示す。
- (29) Canto XIV, p. 63.
- (30) Wendy Stallard Flory, *Ezra Pound and The Cantos: A Record of Struggle* (Yale Univ. Press, 1980) p. 179.
- (31) 『オールウェル著作集IV』(平凡社, 1971) p. 473. この箇所は鈴木寧訳。
- (32) 同上, p. 474.
- (33) 『オールウェル著作集III』(平凡社, 1970) p. 78. この箇所は河合秀和訳。
- (34) Kazin, *op. cit.*, pp. 22-3.
- (35) James Laughlin, *Pound As Wuz* (Peter Owen, 1989) p. 13.
- (36) C. David Hayman, *Ezra Pound: The Last Rower* (Viking, 1970) pp. 297-8.
- (37) Canto XXXV, p. 174.
- (38) 古山高麗雄, 『身勢打鈴(シンセタリョン)』(中央公論社, 1980) pp. 9-10.
- (39) Canto XLVIII, pp. 240-41.
- (40) Ezra Pound, *Selected Prose 1909-1965* (Faber & Faber, 1973) pp. 261-62.
- (41) *ibid.*, p. 151.

- (42) *ibid.*, p. 235.
- (43) Canto L, p. 248.
- (44) Cecil Roth, *A History of the Jews in England* (Clarendon Press, 1964) p. 240.
- (45) Canto LXXX, p. 494.
- (46) Canto LII, p. 257.
- (47) Tim Redman, *Ezra Pound and Italian Fascism* (Cambridge Univ. Press, 1991) p. 186.
- (48) *ibid.*
- (49) Hugh Kenner, *The Pound Era*, (Univ. of California Press, 1971) p. 465.
- (50) ギー・ド・ロスチャイルド著, 酒井伝六訳, 『ロスチャイルド自伝』(新潮社, 1990) p. 115.
- (51) 同上, p. 125.
- (52) 同上, p. 126.
- (53) 同上, p. 135.
- (54) Canto LII, p. 257.
- (55) Louis Harap, *Great Awakening* (Greenwood Press, 1987) p. 65.
- (56) Canto XXXV, pp. 172-73.
- (57) この語句は, 上に挙げた引用の6行目 “It must be……” の直前に出てくる。
- (58) Canto XCI, pp. 613-14.
- (59) Canto LXXX, p. 513.
- (60) Canto XCIII, p. 628.
- (61) Peter Viereck, “Pure Poetry, Impure Politics, and Ezra Pound” (*Commentary*, April 1951) p. 345.
- (62) ジェイムス・ジョイス作, 丸谷オ一・永川玲二・高松雄一訳, 『ユリシーズII』(河出書房新社, 1964) pp. 324-26. 原書では, James Joyce, *Ulysses* (The Modern Library, 1961) pp. 670-74. 以下, 引用の記載は先ず邦訳, 次いで括弧内に原書のページを示す。
- (63) Ira B. Nadel, *Joyce and the Jews* (Univ. of Iowa Press, 1989) p. 108.
- (64) 『ユリシーズII』 p. 363 (p. 708).
- (65) 『ユリシーズII』 p. 382 (p. 729).
- (66) 『ユリシーズII』 p. 359 (p. 705).
- (67) 『ユリシーズII』 p. 379 (p. 724).
- (68) 同上。
- (69) 『ユリシーズII』 p. 35 (p. 370).
- (70) 『ユリシーズII』 pp. 383-84 (pp. 728-29).
- (71) Leslie Fiedler, *Fiedler on the Roof* (D. R. Godine, 1991) p. 50.
- (72) Nadel, *op. cit.*, p. 241.
- (73) *ibid.*, p. 238.
- (74) *ibid.*, p. 17.
- (75) *ibid.*, p. 108.
- (76) 『ユリシーズI』 p. 76 (p. 61).
- (77) 『ユリシーズII』 p. 343 (p. 689).

(78) 『ユリシーズⅠ』 pp. 418-20 (pp. 331-33).

(79) 同上, pp. 44-5 (pp. 33-4).

(80) 『ユリシーズⅡ』 p. 346 (p. 692).